

氏名(本籍)	み やけ やす お 三宅康郎 (香川県)
学位の種類	学術博士
学位記番号	博美第5号
学位授与年月日	昭和62年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当 美術研究科美術専攻油画研究領域
学位論文等題目	(論文) 「佇む風景 — 日常のなかの美しさ —」 (作品) 「GRAIN SHOWER こぬか雨」 他2点
論文等審査委員	(主査) 東京芸術大学 教授(美術学部)芸術学士 大沼 映夫 (副査) " 助教授(")Dr. Phil 越 宏一 (") " 教授(")芸術学士 中根 寛 (") " " (") 稲次 敏郎 (") " " (保健管理センター)医学博士 三木 成夫 (") " 助教授(美術学部)芸術学修士 麻生 秀穂

論文内容の要旨

本作品集は「佇む風景 — 日常のなかの美しさ —」と題し、1980年より1985年の間に制作した作品の図版72点を主とし、作品を作るときに気づいた事と気をつけた事を書き添えている。

作品集は、単なる資料としてではなく、新たな作品として制作した。文章は、美しさが風景と人とのまじわりであるとの視点から、ふだん営んでいる日常の生活に眼を向けて書いている。

「はじめに」では、美術史の中から日常のいとなみに眼を向けた例を概観し、触覚的世界と視覚的世界、子供の絵、民族芸術、さらにアルプ、デュシャン、ジョン・ケージなどの作品、の意味を考え、表現を遠いまなざし(生命の記憶)と新たな体験(不可知ないま)の接点として捉えている。

第1章の「風景のなかの人」では、表現の主体である自分自身をたずねることから始め、日常の生活でさまざまに感じる自分自身の感覚を考察し、視覚の連続性、身体につながり、また身体と風景のつながりを述べている。これらのことから、ふだんに見ていることは自分を含む風景まるごとを感じていることが明らかになる。感じるということでは、特に子供の成長に接すること

で気づかされる、体験的な感じと経験的な感じとの違いとそのつながりを述べ、絶えることなく流れる生命的な体験と経験の枠（意識）の対照と、それらに対応するものの捉え方について例をあげ考察している。その中で、ふだん感じる美しさは、眼球をはじめとする筋肉が開かれた状態での風景とのまじわりであることを述べている。

第2章の「美術表現の過程」では、日常の生活からの資料（スケッチ）の収集で問題となる点、特に目的（枠）について考察している。さらに経験的な捉え方と新たな発見の対照について考察し、表現には両方必要であるが、資料の収集には連続性が重要であることを述べている。また表現そのものがどこかで区切れるようなものではないことから、日常の触れ方・つかまえ方・指さし方が表現に現れることを述べている。さらに制作時に問題となる「何を表現するか」を例をあげて考察し、イメージは表現の過程（その都度の捉え方の中）で形づくられることを述べている。またできあがった作品を見る立場から、作品は何を表しているのかを表現の部分と全体の関係から考え、作品に対する判断と自分自身の動きについて述べている。

第3章の「表現の限界と美しさ」では、表現と思考の関係を述べ、総合的な思考と分析的な思考、それらに対応する図像的な捉え方と言葉的な捉え方をあげている。捉え方は現象（風景）に気づくことから始まることを述べ、創造表現における認識の順序の大切さと、ふだんの生活と表現とのつながりを明確にしている。また美術表現における感覚の意味を形や明暗の変化、色あいや材質の変化、真似・学ぶこと、美意識、文化の伝承などを例として考え、美術による表現は、美しさを指さすひとつの方法であり、美しさそのものを表すのではないことを明らかにしている。またふだんの生活での意識できる範囲を拍子とリズムとの関係を通して考察し、意識（表現）の役割について述べている。

「おわりに」では、意識できるものの限界に気づくことで、意識できるものを「すがた・かたち」そして「しかけ・しくみ」として触れ・つかまえ・指さす表現に感じられる美しさについて言及している。

付記1では、図版のなかから32, 33, 34, 35ページの作品「The Carrot Spring Road」を取りあげ、その制作時に気をつけた点をメモしている。日常の生活と作品のつながり、作品の中のさまざまな対照を具体的に示し、それに対応する技法について述べている。

付記2では、図版全体に関して制作の過程で気づいたことを述べている。幾何学的な部分と有

機的な部分，計画的な部分と偶然性を受け入れる部分，鉱物と植物の対照，「わかりやすい」一面と「わかりにくい」一面，などを例をあげ述べている。また材料や技法は，多様な在り方のなかでの流動的な生を指し示すものであることを述べ，表現の生きたおもしろさは，表現のあらゆる過程のなかで，現れては消えていくささいなことの中にあると述べている。